

# 海外俳句における季語

— 「白夜」と「花野」 —

太 田 かほり

## 要 旨

国際化時代となり海外俳句は急速に増加している。海外俳句の問題点の一つに、日本の四季にそって詠まれてきた季語を外国の気候風土の中でどのように用いるかということがある。俳句歳時記に登録された「地球季語」の第一号は「白夜」である。今回、海外俳句の第一人者鷹羽狩行先生と共にロシアのサンクトペテルブルグおよびバルト三国を訪ね、当地の白夜を経験した。白夜の句はすでにカナダ、オランダ、スウェーデン、モンゴルなどで多く詠まれているが、白夜の印象が異なっていることに気づき、「地球季語」の本意が拡大する可能性を感じた。また、日本の風土の中で洗練されてきた季語「花野」が海外でそのまま重なるものでもないことに気づき、日本においては基本季語になっているものも本意の広がる可能性を感じた。季語「白夜」と「花野」を中心に考察し、あわせて今回の旅で詠まれた鷹羽狩行の作品の解釈と鑑賞をする。

## 1 海外俳句の課題

鷹羽狩行は、昭和四十四年、〈摩天楼より新緑がパセリほど〉という句を発表して以来、海外俳句の先駆者として今日の海外俳句発展の道筋をつけ、現在の日本の俳句人口二千万、海外の二百万のリーダーとして、常に俳壇の第一線で活躍してきた俳人である。海外俳句だけで一冊をまとめた異色の句集『翼灯集』がある。

俳句の国際化には翻訳という問題を初めさまざまな課題があるが、海外俳句（日本人が海外旅行で作った俳句）、在外詠（海外に住んでいる日本人が現地で作った俳句）の裾野の拡大という大前提がある。

鷹羽狩行が講師を務める NHK 学園海外スクーリングは、平成六年から実施され、海外俳句を発展させる活動としてその魁となってきた。平成十八年七月、同スクーリング「サンクトペテルブルグ、バルト三国俳句紀行」に幸いにも参加することができた。添乗員も句会に参加することを義務づけ、講師を含め総勢二十四名、最高齢は八十五歳、八十代が三人、平均年齢は推定七十歳と思われる一行であった。全行程十一日間、現地での延べ千二百四十キロ、一日平均百キロのバスの旅、句会二回を全員がクリアした。句歴は初心者からベテランまでさまざ

までである。以下、この見聞をもとに、海外俳句における季語の問題および鷹羽狩行の俳句について考察する。

成田出発に当たって海外俳句の心得として、出発の七月二十一日は俳句では秋であるが、現地で見聞したものにいつの季節を感じたかによって作ることという話があった。

## 2 季語「白夜」

成田発空路フランクフルトを經由してロシアのサンクトペテルブルグに向かった。サンクトペテルブルクは十八世紀初頭から二十世紀初頭まで帝政ロシアの首都として栄えた。旧レニングラード、現首相プーチンの出身地、先ごろサミットが閉幕したばかりである。到着は現地時間二十二時。東京とフランクフルトの時差が七時間、さらに一時間の時差。サンクトペテルブルグの街は、行き交う人々も車も多く、外は明るく、日本では日暮れ間もない感じだが、これで夜の十時であった。これが白夜であった。

橋多き水の都の白夜かな 鷹羽狩行

サンクトペテルブルクはネバ川の左右に広がる美しい街である。街の中心になる左岸は歪な八角形の半分の形をなし、一点を中心に放射状に道路が走り、同心円を描いて運河が流れ、さながら蜘蛛の巣を思わせる。三百以上もの橋が架かり、夜には跳ね橋となる。白夜の季節は夜毎新たな恋が生まれ、数々のドラマが展開する舞台となる。北のベニス、水の都と称えられる街へ、まず挨拶の一句を献上する。謙譲語を使いたくなるような重厚な石造りの大都会である。街を特徴付ける風景の諸々を削除し、白夜の中に横たわる大都会の最も個人的な要素のみを取り出し、単純化した。とはいえ、橋も都も人間の営みであり、直接は描かれていない人々が自ずからたち現れてくる。水の都の水も、白夜の国の明るい夜も、共に大いなる自然からの賜り物である。

ところが、四日間の滞在中に過去に訪問した国々で経験した白夜の印象とここロシアの白夜とではどこか異なるように感じられた。

「白夜」は歳時記に登録された「地球季語」第一号であるが、白夜といっても時と所によって異なることになり、それを説明し証言するためには例句となる名句がなければならない。鷹羽狩行にはすでに評価の定まった白夜の代表句があるが、それに並ぶ名句の誕生が期待される旅となった。

サンクトペテルブルグの冬は午後三時には日が落ちる。訪れた七月下旬は、夜中の十二時頃によろやく暗くなり、朝の三時頃には早くも夜が白み始めるといふ最も白夜らしい、言い換えると短い夏の真っ只中であつた。天体の運行の不思議を経験できる幸運な季節であつた。

『白鳥の湖』を観てなほ白夜 鷹羽狩行

午後七時開演、九時終演。バレエの国でバレエを楽しむ。夕食後の華やいだ雰囲気をもったまま劇場に向かう。ほろ酔いの心身は甘く気だるく、日常から解き放たれた心身は羽を得て軽い。旅は始まったばかり、楽しみは明日からが本番。この条件が気分を最高潮に誘う。演目は『白鳥の湖』。俳句という十七音の短い詩形の中に固有名詞を入れることは極めて難しいことであるが、この固有名詞が抜群の効果を上げている。世界共通の情報として働き、バレエといえはまず上げられるタイトルの力を生かしている。実際、筋も見所も承知、解説の一つもできようという余裕があり、ハッピーエンドの結末が浮いた気分を損なわない。主人公の清楚なイメージ、ドラマ性などが旅の一夜、それも白夜の一夜を華やかに演出する。ドレスアップした観客に混じる面はゆさ、気恥ずかしさ。本場ロシアの『白鳥の湖』を堪能する満足は何よりの土産話となる。こうした一行の雰囲気を反映した軽やかな句である。

——そして、閉幕後。カーテンコールに続く再びの拍手は「白夜万歳」であった。斜めに射す太陽の光は濃く黒い影を投げかけていた。黒鳥の見事な踊りに劣らず、白鳥の可憐な踊りにも勝る感嘆の声が上がった。「なほ」にその驚きがとどめられている。白鳥の白と白夜の白が効果的である。

昼よりも空あをあをと白夜かな 鷹羽狩行

ホテルに戻る道すがら空を見上げ、二度三度、白夜の空の青さに驚く。

白夜なり白夜なりとて赤ワイン 吉川正光

かくしてこのような光景となる。白夜をさらにドラマチックに演出するのはワインである。それも赤。白夜の白とワインの赤、色彩の構成も見事な即興である。「白夜に乾杯」「白夜に乾杯」を口々に、いつまでも更けない夜を楽しむ。作者吉川氏の令嬢が日本を代表するバレリーナであるという情報が話に華麗な花を咲かせた。

### 3 第一回句会

果たして第一回目の句会は「白夜」に席卷された。以下、その作品である。

ネバ河のさざなみ睦み会ふ白夜 岡本俊子  
聖堂を遙か白夜のデッキより 大堀柊花  
街路樹の影いつまでも白夜かな 熊倉美子  
白夜つんざく海からの鳥の声 石橋万喜子  
白夜こそよけれ古城も尖塔も 石橋万喜子  
まだ見ゆる沖に船影白夜かな 伊藤節子

白夜にもやうやく馴れてカフェの客 境 敦子  
黒パンになじみ白夜にまだ慣れず 笹島美和子  
抱擁の影いつまでも白夜の国 平地美紗子  
森深く湖眠る白夜かな 渡辺民子

#### 4 季語「白夜」考

季語「白夜」について、拙著『鷹羽狩行の俳句』（平成18年10月刊。角川書店）より引用する。

諸橋轍次著『大漢和辞典』十三巻本（大修館書店）に「白夜」の語はない。中国の類書『佩文韻府』に、詩文の用例として杜甫詩と孟郊詩の二件が見られる。

（杜甫詩） 白夜月休弦 夜に向ひて月弦を休す  
燈花半委眠 燈花半ば委するとき眠る  
（孟郊詩） 秋月吐白夜 秋月白夜を吐き  
涼風韻清源 涼風清源に韻く

前者は「夜二首のその一」と題した五言律詩の第一・二句目、後者は詩題・詩形とも未詳、二例ともいわゆる白夜の意味では使われていない。

英語では、〈white night〉は「眠れぬ夜」の意となり、白夜は〈the night of the midnight sun〉と表現するところから、訳語とは考えられない。

『日本国語大辞典』二十巻本（小学館）では、短歌・俳句での用例として北原白秋・山口青邨の作品を載せているが、中国古典の出典は記載されていない。

これらにより、「白夜」は日本語と判断される。

一九八二年刊行の『カラー図説日本大歳時記』（講談社）には、鷹羽狩行の筆により次のように解説されている。

〈北（南）緯六十六度以北（南）では、夏至の日に太陽が没しない。北半球ではアラスカ・カナダやシベリアの北部、北欧で見られる。白夜という語感もよく、海外詠の好材料であろう。〉

以上、白夜について拙著より引用した。

夜も太陽が沈まないという話は、白夜の国を神秘の国、おとぎの国のようにイメージさせる。白夜という言葉は美しく、ハクヤと読んでもビャクヤと読んでも響きがよい。響きもよいが漢字の表記もすばらしい。黒でイメージされる夜を白との組み合わせで第二の闇として表す。この文字の発明が白夜を詩の言葉にした要因だろう。日本人には「夜長」「短日」「明け易し」などの季語を育んできた民族としての経験や感性がある。その延長線上に未経験の白夜が想像される。昼夜の長短や時刻の微妙な差異を敏感に感じる民族的特質が、他国の季節を表す白夜を季語として受け入れる素地を培っていると考えられる。

これまでに訪問したカナダ、モンゴル、オランダ、ドイツなどで経験した白夜から季語「白夜」をこのように考察した。

帰国後、鷹羽講師から「白夜の句ができないんですよ」「違っていませんでしたか。太陽がぎらぎらでしたね。」と聞き、違和感は筆者だけのものではないという確信を持った。鷹羽講師には今回の吟行の主要な季語は間違いなく「白夜」となるという前提のもと、本紀要の原稿に引用したい旨を述べて、一年間の推敲期間を置いて発表するという方針を曲げて季語「白夜」の作品を示していただきたい旨を依頼しておいたのであった。

海外詠『翼灯集』の代表作となっているスウェーデンでの〈やさしきは白夜の国の羽根布団〉や同じく『翼灯集』中のカナダ詠〈着陸の灯はや白夜の灯にまぎれ〉〈淡からず白夜の国のシャンデリア〉の白夜の雰囲気とは異なっていたことを述べられた。その点について旅行後に鷹羽講師が「季刊文科」に寄稿されたエッセイの一部を引用する。

〈季刊「文科」2006年秋より〉

人は人木は木白夜の十一時 狩行

夜でありながら人間は人間、樹木は樹木とはっきり認められる。「人は人」「木は木」といった当たり前のことが神秘的に、不思議に思われるのも、日本の日常では体験できない。(中略)

昭和五十八年にカナダで〈着陸の灯はや白夜の灯にまぎれ〉〈淡からず白夜の国のシャンデリア〉の句を作っている。

やさしきは白夜の国の羽根布団

は、平成六年のスウェーデンでの作である。ホテルの布団は白鳥の羽毛入りと聞かされ、その夜はまるで白鳥にかこまれているかのような気分で眠りについたことを思い出す。

今回はこれらの句を超える作品ができなかったように思う。白夜の体験も、初めてのほうが感動が大きいということか。

季語「白夜」のイメージをこれまでは与謝野晶子の〈何となく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな〉の浪漫（ローマン）に通低する雰囲気としてきた。夏の夜の涼しさという快適さと東洋の春宵の趣を漂わせているように感じてきた。おそらくこれまでの白夜の作品について多くの読者がそのように鑑賞してきただろう。我々は地球は広いという認識に立ち戻らなければならない。ロシアのサンクトペテロブルグの七月は、ほのかに明るい夕方が長いのではなく、太陽の出た昼間の明るさが長い。スウェーデン、カナダ、モンゴルなどの夕方の長い白夜とは異なっているという認識をしなくてはならない。アラスカの夏のように一日中太陽が沈まない場所もある。その違いが海外俳句の広がりになる。例えば、一茶が〈是がまあつひの栖か雪五尺〉と詠んだ雪と子規が〈いくたびも雪の深さを尋ねけり〉と詠んだ雪とは異なるように、どの土地を背景にするかによって季語の本意が異なる。雪国では生活を脅かす脅威としての雪が南の国では美しく楽しく愛でるもの、すなわち雪月花としての雪となる。海外の季

語として最も早く歳時記に登場した「白夜」だが、海外俳句においては詠まれた場所は鑑賞の上で切り離せないものになるという認識あるいは前提ができたことになる。その意味では今回の吟行は一つの大前提を作った貴重な旅として位置付けられる。ただし、例句としてふさわしい名句が示されることによってのみ、公認されるものである。

鷹羽狩行は、海外吟行句などは一年間の推敲期間をおいて発表するという方針を宣言しているが、前述の通りこの原稿のために曲げて未発表の作品を提供していただいたものについて以下の鑑賞を試みる。

## 5 鷹羽狩行の「白夜」詠

人は人木は木白夜の十一時 鷹羽狩行

日本では彼方にいる人が見分け難い夕方の薄闇の時刻を「誰そ彼は」（誰かあれは）から「たそがれ」どき、明け方の薄暗さに「彼は誰そ」（あれは誰か）から「かはたれ」どきという時刻の呼び方が生まれた。四季の移ろいのみならず誰とも定かに見分けられない時刻の微小な差異も繊細な美意識を磨いてきたといえる。中国の「春宵直千金」は光の明暗というより季節の柔らかく快適な空気を尊んだものである。

さて、サンクトペテルブルグの白夜の十一時は彼方にいる人間は紛れもなく人間に、樹木は紛れもなく樹木と判別できる明るさである。句の要は「十一時」という時間にある。世界の常識は夜の十一時は闇が支配する。夜陰に紛れて物の区別はつかず、行動も著しく制限される。その十一時という時刻に物が判別できるという不思議がこの地球にあるという驚き、言い換えると宇宙の神秘への感動が一句を立たせた。白夜は多くの旅行者によって経験されてはいるが、「どこ」の「何月何日頃」の「何時頃」の自然の現象であるかの範囲までは問題にされてこなかった。今後、優れた例句によって季語の本意の範囲が広がる可能性が出てきたことになる。この句は作者の解説通り日本では見られない地球の神秘を意図したものである。天体の運行による土地特有の現象は海外俳句において最もテーマとしたい点である。

船に人運河に泳ぐ人白夜 鷹羽狩行

運河に架かる橋は三百四十以上、どれも跳ね橋である。午前一時頃から四時頃まで橋が上がり、橋は通行不可となり、昼間は通行できなかった大きな船が往来できる時間帯になる。跳ね橋になる時刻にはまだ早く、船で遊ぶ人にとっては言うまでもなく、働く人にとっても白夜の明るさはありがたい。水遊びに興じ、釣をしたり、水泳をしたり、昼間と変わらない太陽の光を存分に楽しむ。長い長い冬を過ごさなければならない宿命の下にこの街で生きる人々にとって白夜は歓喜の季節である。夜を遊びに遊び、冬への活力とする。働きに働きこれまた冬へ

の蓄えとする。

すれ違ふ白夜夫人は帽のうち 鷹羽狩行

夜ならば帽子は要らない。だが、ただの夜ではない。昼間のような白夜である。日除け用の罌の広い帽子を被った夫人とすれ違う。傘のうちならぬ帽子のうちなる顔だちは定かではないが、目に留まり句のモデルになるのだから美しくない訳がない。ときめきながらすれ違い、すれ違って弥増すときめき。夫人とは人妻。妙齡などではない。歴とした何々夫人のかもし出す艶なる風情に旅の心が弾む。芭蕉も奥の細道の後半、市振にて〈一家に遊女もねたり萩と月〉と詠んでいる。遊女ならぬロシア女性という非日常に旅情が募る。

騎馬像や更けて白夜に躍り出づ 鷹羽狩行

白夜更けなば騎士像に羽根生えん 鷹羽狩行

ネバ川左岸の中心地近くデカブリスト広場に、プーシキンが抒情詩に歌ったピョートル大帝像「青銅の騎士」が建っている。漁民しか住まない沼地を都市にすべく詩は、「自然がわれわれに命じている、ここにヨーロッパへの窓を穿つべし」と歌う。ピョートル大帝は、厳しい自然環境を制して帝政ロシアの首都を建設した。ここが沼地であったとは現在の堅牢な街の様子からはうかがいしれないし、近代ロシア国家建設のためには「西欧への窓」が不可欠と考えた大帝の功績ははかりしれない。運河を掘り、杭を打ち、建材を運搬するなどの労働に使役された農奴や捕虜たちに果たして白夜という自然は味方となっただろうか。白夜に労働を強いる敵となっただろうか。「屍の上に築かれた都市」とも言われる事実を目を瞑る訳にはいかないが、建設は続行され、繁栄への道筋がつけられた。

威風堂々たるサクトベテルブルブの街の中央にピョートル大帝の騎馬像が建つ。今にも大空に飛翔するかとも思われて両前脚を跳ね上げた馬は躍動感に満ち満ちている。少なくとも白夜は大帝には全面的に味方しただろう。自然を味方に組み入れた大帝が時を隔てて今しも白夜に踊り出ようとしている。大帝も白夜に挨拶する。そして、白夜を短しとばかり馬駆け、街を駆け、空を駆け巡る。それは、白夜の歴史物語、いや、おとぎ話である。俳句もプーシキンの詩に並ぶ抒情詩となる。

これら二句の心は同じであり、正式発表時にはどちらかが残されどちらかは没になるか、あるいは新たに推敲された作品が生まれることになるだろう。筆者としては、仮定形「～なば」+推量「～ん」よりも、「更けるのを待ちかねて素晴らしい白夜に躍り出てしまったことだよ」という見立ての方をとりたい。躍り出さずにはいられない白夜であり、騎馬像の躍動感であるという印象に、より迫力が感じられる。

なお、俳句では「多作多捨」という言葉がある。たくさん作ってたくさん捨てるという作句方法である。捨てた後に秀句が残るとされる。短歌や詩、あるいは他の芸術との大きな違いである。

旅人のために白夜の長かれと 鷹羽狩行

「旅人」とはすなわち作者自らに他ならない。旅そのものが非日常である上に白夜という稀なる非日常の体験に興奮は禁じ得ない。貴重な旅の夜を、またとない白夜の不思議の中に過ごす。

橋あれば橋のかたちに白夜の灯 鷹羽狩行

揃ふこと美し白夜バレエ団 鷹羽狩行

尖塔が立てり白夜をよく見よと 鷹羽狩行

以上の句の中から、将来、「海外俳句の歳時記」の例句が選ばれることになるだろう。

## 6 名所「エルミタージュ美術館」「夏の宮殿」詠

うつすらと金の孔雀に緑さす 鷹羽狩行

緑の壁に白い柱、金の装飾が施されたバロック建築の壮大な建物——これがロシアが誇るエルミタージュ美術館である。歴代のロシア皇帝の住居であった「冬の宮殿」である。四百もの部屋を有する三階建ての荘厳な外観、絢爛たる内装、三百万点に上る超一流のコレクション、サンクトペテルブルグを訪れるとはこの美術館を観ることといわれるのも宜なるかな。壮麗、華麗、言葉を失い、酔いに酔い痴れ、感覚はしだいに麻痺し、茫然自失。絵画、彫像、陶器、宝石、王冠などなど、大から小まで所狭しと陳列された無数の何をどのように見たものやら、これが世界というものであった。完全に圧倒され、打ちのめされ、押し出されるように宝の山を通過した。これが俳句になるものか。東洋の小さな日本の小さな詩形がこの一角なりとも詠み留めることが果たして可能だろうか。

俳句は信頼するに足る詩形であった。

「金の孔雀」は装飾の粹を凝らした繊細優美、華麗で巨大な見事な黄金の鳥であった。孔雀自体が大柄で美しく目を引く生き物である。それを模した金製の孔雀がどれほど素晴らしいものであったかは言うも愚かなことである。目を凝らし、目くるめくばかりの眩さに声を上げ、あるいは息を飲んだ。とはいえ作り物である。ここに自然界の「緑」を配するだけで、魂を吹き込むというマジックを見せた。青葉を照らす初夏の明るい光がさすとしただけで金の孔雀に

命が宿る。これが、俳句というものであった。この十七文字もエルミタージュ美術館に陳列したいものである。ことごとく人工的な美術品の中に「緑さす」という季節の美しさを注ぎ込んだのである。「緑」は美術館の緑の壁もイメージさせるというこみ入った配慮がされている。

夏も膝毛布二重に画廊守 鷹羽狩行

一方ではこのようなところにも目が向けられる。部屋毎に配置された画廊守によって美術館は秩序を保っている。

宮殿を水路で訪ひて夏惜しむ 伊藤節子  
宮殿の奥にいざなふ夏木立 今野佐知  
緑陰のリスの親しき露国かな 大堀柊花

夏の宮殿と呼ばれるピョートル宮殿はエルミタージュ美術館裏の船着場から高速艇で約四十分の郊外にある。十八世紀初め、海から段々とテラス状に高くなっている地形を活かして建設された宮殿である。「水路で訪ひて」が大規模な運河の街らしさ、宮殿の位置などを表すとともに舟遊びも連想させ、東の間の夏を惜しむ当地の情景をよく表現している。船着場からさらに続く細い運河に沿って正面の宮殿を目指す。石造りの街に圧倒された目に運河沿いの緑は最高の歓迎であった。栗鼠の出現も思いがけない歓待である。初心者は「緑陰」「夏木立」「片影」などの季語を学ぶ。一気に季語が氾濫するところへといざなわれ、句種に苦慮していた心身に勢いよく精気が吹きこまれた。

宮殿へ列柱なせる大噴水 鷹羽狩行

「夏の離宮」らしい歓迎は噴水、噴水、また噴水、ガイドブックには百五十はあるという噴水群であった。水攻めのうれしい歓待に二度三度俳句創作から突き放される思いであったが、西洋を詠むべしとばかり立ちはだかる季語「噴水」を宮殿らしく列柱と見なしたみごとな句である。列柱とは西洋建築で玄関の前面に装飾として設けられた柱の列をいう。装飾というにはあまりに大仕掛けであり、動きも季節感もある趣向である。宮殿には無数の柱があり、その数が規模を表し、豪華さを誇示する。フランスから、イタリアから、各地から、名だたる建築家が集められ、ピョートル大帝自らも設計に参画したといわれる。世界に宮殿は多いといえども水を大々的に活かした意匠はこの夏の離宮においては他にないだろう。観光パンフレットなどに必ず大きく紹介される名所中の名所を写真にも勝って視覚的に、華麗に、格調高く描いた。巨大で贅を尽くした噴水を「列柱なせる」とした見立ては比喻にとどまらず、宮殿建設に携わったすべての人々への賛辞となり、訪れた人々の感嘆と賞賛を代弁する。正面から敬意を以つ

て正攻法で詠んだ句である。

噴水の虹宮殿にようこそと 渡辺民子

技術者たちは果たして「虹」までも計算していただろうか。人工の噴水に自然の法則に従って虹が架かる。

羽根ペンが一つ大宮殿の夏 鷹羽狩行

絢爛たる大宮殿の中から最も効果的な物を一つ抽出し、宮殿らしさと夏らしさを出す。装飾の限りを施した調度品や名画など宝物であふれている所が宮殿である。建物そのものはいまでもなく、床から天井まで豪華尽くしである。金や琥珀も天然ではあるが、羽毛という天然は何とも親しみやすい。羽ペンという簡素な物を選び、大に対する小を取り出して夏の涼しさを表す。大宮殿の中に羽ペン一つを置いた光景はいかにも涼しい。だが、その羽ペンが一国の運命を決めたとなると重い。歴史を動かす場面で使用されたかもしれないなどと想像は無限に広がる。最大限の想像をすると、これを使って認められた書面が戦争か平和かの決定打となった可能性もある。想像の広がりが涼しさも広げていく。

宮殿の鉄壁なせる片かげり 高田 裕

中国の漢字「城」は壁を廻らして街全体を守る役割を担う城壁を意味するが、西洋の街もそのようなものが多く、宮殿そのものを守る堀や塀はない。例えば、帝政ロシアの冬の宮殿である現在のエルミタージュ美術館は観光客は広場から、またはネバ川沿いの道路から直に入ることができる。しかし、三階建て、四百室もの宮殿の落とす影は片蔭といえども人を拒む厳しさである。外観は緑の壁、白い柱、金の装飾が映えて美しいが、落とす影は黒く細長く、日盛りには「片蔭」というのに相応しい幅である。長方形の建物が作る影は直線をなし、「鉄壁」という表現は宮殿らしさを捉えている。「琥珀の間」で知られるエカテリーナ宮殿やピョートル大帝の夏の宮殿での光景としてもよく、海外らしい句である。

日盛りや支柱の像の力瘤 石橋万喜子

エカテリーナ宮殿はブルーの壁、白い柱、金の装飾、そして支柱にたくさんの彫刻が施されている。男性像はたくましく、一体一体の腕の一本一本が建物全体を支えるかのような隆々たる力瘤を露にしている。真夏の日盛りの暑さの中で大きな汗の塊のようにも見える。暑さと力瘤が相乗しあっていっそう力強く映る。

## 7 季語の選択

### 〈聖堂 教会〉

天井画へつづく壁画の冷まじや 鷹羽狩行  
モザイクの壁画づくめや夏館 坂本禎子  
モザイクのニコライ像に西日さす 佐々木富久子

「血の上の教会」での作である。隙間もなくかかげられた壁面の宗教画のほとんどがモザイク画である。床から天井までモザイクによる細かい装飾で埋め尽くされ、繊細微妙な色の濃淡には作者が表そうとした人物それぞれの表情やドラマが語られている。余白の美を尊ぶ日本的な感覚から「冷まじ」という季語が出てくる。秋気凄冷の感じというより「ものすごい」という意が近いだろうか。

塔の小窓から一直線に差しこむ光は、宗教的啓示のようにも思われた。床までは達せず、その高さが夏館らしい涼しさを感じさせる。一方で、「西日さす」暑苦しい光景とも感じるの、船乗りの守護神ニコライから海軍や原潜事故の犠牲者への連想があったためかもしれない。三者三様の季語の使い方である。

鷹羽狩行はかつて海外詠で、

緑さす祈りの膝は床につき 鷹羽狩行

と詠んでいる。「緑さす」は西洋風な明るい雰囲気を感じさせ、教会で祈りを捧げている若い女性の美しい姿が想像されてくる。祈るという清らかな心の姿まで描かれた作品である。この絵画的な静かな句に対して今回は、

祈るとき胸の谷間のサングラス 鷹羽狩行

と詠んだ。

汗涼し聖堂を日に二つ訪ひ 鷹羽狩行

とも詠むような行程で、敬虔な信者の姿を数多く見る機会があったが、祈りのポーズもさまざまであること、観念的な場面ばかりではないことなど、気づくことも多くあった。サングラスの句は主題を祈りではなく風俗においた。西洋の女性の豊満な肉体を詠んだ俳諧性の強い視点である。俳句は俗を詠むものでもあり、おもしろい作品である。

## 〈運河クルーズ〉

北のベニス、水の都といわれているサンクトペテルブルグの街を遊覧船から眺める。さまざまな季語が登場した。

長さ涼しや航跡も航雲も 鷹羽狩行  
船遊び戻りもくぐる眼鏡橋 鷹羽狩行  
航跡に浮草なびく運河かな 佐々木富久子  
うすものの裾をひらりと船着場 松尾重子  
釣舟を横目に遊び船速し 佐々木さち  
ネバ河畔より遊船へ投げキッス 田中喜美子  
涼しさや直線多き運河街 太田かほり  
艦の基地ありしところに船遊び 伊藤節子  
貧しきも富むも涼しき運河べり 岡本俊子

「船遊び」「浮草」「涼しさ」「うすもの」が夏の季語である。いずれも運河クルーズの楽しさを詠んでいるが、次の句は違った趣である。

暑き日のタイヤ鎧ひて伝馬船 鷹羽狩行

船縁にクッション用の襦袢タイヤを廻らした舳は遊船の多い運河の中で目立たない存在であったが、現地の人々とその暮しぶりがうかがえておもしろい。

## 8 季語「花野」

石造りの街全体が世界遺産に指定されているサンクトペテルブルグは「山紫水明」という言葉で代表される日本の俳句風土とは全く異なっていた。ロシア帝国の燦然たる遺産もまた、「わび、さび」で表現される日本の伝統文化とは接点がないかのように見えた。異なった自然、異なった文化に出会い、目を見張ることばかり多く、感動の種は極めて多く、新鮮で刺激的であるにもかかわらず、それらを句に詠もうとすると戸惑うばかりであった。筆者のみならず一行の多くが同じ印象を抱いたと思われる。

そんな一行の前に、国境の街ナルヴァを目指す途中、弥が上にも創作意欲を掻き立てる季語が飛び込んできた。「花野」である。

ロシアからエストニアへ、サンクトペテルブルグからタリンへ、約三百六十五キロ、専用のバスで約七時間、日本を出発して五日目のことである。人間の技術と想念の凝縮した堅牢で華麗な異文化に浸りきった心身が再会した懐かしい自然である。サンクトペテルブルグから遠ざかるにつれて道の両側には秋の草花が点在し始め、やがて、花野の帯となり、花野の海となっ

てどこまでも我々に伴走する景色は、忘れかけていた日本人の、いや俳人のと言おうか、その感覚を一気に蘇らせる魔法のような力があつた。

花野また花野国境へと一路 鷹羽狩行

秋の草花が車窓を流れていく。紫のかたまり、白のかたまり、所々に赤や黄が点々と交じる。遠ざかり、近づき、また遠ざかる。野を彩る秋草の小波が後ろから、前から、うち寄せては曳き、曳いては寄せる。道の彼方にも、その先の遙かにも、花野が広がり、続く。遠くを眺め、近くに目を戻す。どの窓にも、誰の目にも、花野が映る。夢のように続き、夢の続きのように続く。絵本を繰るように、絵巻を巻くように眺めが展開する。花の海を泳ぐかのように、時には溺れるかのようにバスが走る。無尽の海である。まれに人影が過ぎり、牛が過ぎり、赤い屋根が過ぎる。

竜胆を探し、撫子を探し、あるかもしれない尾花を求め、水引草や吾亦紅を探す。名前が出てきそうで出てこない花、見覚えのあるようでない、知っていそうで知らない、似ていて異なる、そんな草花で彩られた野原である。どこにもありそうな馴染みの刈萱や狗尾草や麒麟草などが風に靡いていたのではなく、七草の一つも見当たらず、やはり異国の花野なのだが、一行の目は花野を満喫した満足を湛えていた。

庭に花咲かせ花野の中に住む 鷹羽狩行

地球上の地表のいずこにも人の暮らしがある。一面の花野の一角を区切って家を建て大地を区切って庭とする。どこからどこまでとは定かではない大らかな区切りの中に私有地があり、それらしく手を入れて花を咲かせる。それも花野に咲く同じ秋の野の花を咲かせる。花野ともなく、我が庭ともなく、花が咲くことを喜ぶ暮らしを垣間見、花に囲まれ花に埋もれる夢幻のような暮らしを目撃する。地球上の一点にこのような穏やかな暮らしがあつた。もしやこれは空想の光景ではないか。そのように暮らしてみたいという憧れが見させた現実に近い非現実ではないか。いや、やはり、花野の中に花を咲かせる暮らしがこの広い世界には現実に存在した。その雅やかな心栄えに打たれた。質朴な暮らしの代償として捨て去ったものを想像して、やはり、深く打たれた。

丈ほどの花も露国の花野には 鷹羽狩行

吾亦紅、すすき、刈萱、萩、女郎花、男郎花など、敷島の大和の国原には秋風にうち靡き、秋雨にうち伏す丈の高い草々がある。一際あわれを誘うそれら秋草の丈よりも高く、人の背丈ほどの花がロシアの花野に群れていた。なべて異国のものは丈が高い。日本からはるか彼方の

ロシアの国に空想の翼を羽ばたかせた時から、いや、ずっと以前から、漠然とロシアを知った時から、ものの本などにその名が出てくるつど、訳もなく丈の高い国というイメージを育ててきたものだった。人の背丈も、樹木の丈も、国の体勢なども、日本の身の丈をしのぐもののように描いてきた。ロシア、旧ソ連に抱く先入主がこの句に秋草のみならぬものの丈を重ねさせたのかもしれない。高さは物によっては憧れであり、しばしば脅威でもあった。今回の旅では高さの隠した向こう側の世界が展望できた訳ではなかった。ロシアの花野の花の丈から潜在的な意識が顔を出したのは、もちろん、筆者の誤読である。

昭和三十三年作に、

等身の秋草を過ぎ逢曳す 鷹羽狩行

の句があるが、現代ロシアの恋人たちも身の丈を覆うほどの秋草の中で密会をすることだろう。野原の花が逢曳きを一段とロマンチックにまたスリリングに演出する効果は、地球上のどの地点でも同じことだろう。この句はロシアの光景にも当てはまる。日本の万葉の野原にも相応しく、昭和や平成の恋人の姿としてもよいような句であるが、時代ばかりか、どこの国の恋人としても鑑賞できることに気づき、その普遍性に改めて驚かされる。半世紀前に詠まれ、最も日本的な風土の中の恋人像とされる句が、時間・空間を隔ててここロシアの風土の中にも異和感なく収まる。

城壁の長きは花野守るため 鷹羽狩行

中世の欧州や古代の中国は、都市の周囲を石や土の建築物を壁のように廻らし、外敵の侵攻に備えた。その建物を城壁あるいは単に城といった。万里の長城はその例である。どれほどのエネルギーを費やしてその城壁は廻らされたことだろう。労力も時間も資材も投入して堅牢に造られた城壁がその時々の街や人々や財産を守り、重要な役割を果たしてきた。時が流れ平和な時代には城壁が本来の目的以外に利用される。世界遺産に指定された西洋のとある城砦は、村人の食糧貯蔵の倉庫として、新しい役目を負っているということである。戦のない時代ののどかな話題である。が、「花野守るため」としたこの句の発想は群を抜く。痛快な飛躍である。まるで天上界の話のようである。そこにも花を巡って諍いがあるとする楽しさ。花野の素晴らしさは神々の世界でさえ争いの種になる。他愛なさ、微笑ましさ。花野を守るために城壁を長く廻らす。誰の進入も阻止する。可憐な秋草と堅牢な建造物という mismatch が今現在の静かさ、すなわち平和を伝えている。

十字架の丘はるかまで花野延べ 鷹羽狩行

行程中、一行一同がある一つの感慨に包まれた場面があった。「十字架の丘」と呼ばれるところである。宮殿、教会、聖堂などを多く巡ってきた行程では目を驚かす文化にさらされてきたが、しみじみと季節を感じたり、胸に染み入る光景を見たりすることは少なく、圧倒的な石の文化を日本とは異質の文化として楽しんできた。楽しんだという言葉が相応しい行程であった。

バスは麦秋の中を走った。黄金色の麦畑は快適なバスの旅を伴走した。ラトビアの首都リガとリトアニアの首都ヴィリニウスを結ぶ高速道路の沿線にその丘はあった。実りを迎えた麦畑に続くなだらかな丘一面に大小さまざまな十字架が建てられ、その数の多さはいかなる説明も拒む迫力で異邦人であり異教徒である我々を一つの感情で包んだ。人毎に「嵯峨野の念仏寺ですな」「津軽の恐山のようにすね」「モンゴルの……」と呟いた。ある一つの感情と感じたものが日本やアジアなどで行われている宗教儀式に共通するものに対する日本人の感情であることを、期せずして発した彼らの呟きから理解した。旅情という甘いもの、旅の楽しさ、異文化に触れる興奮というものではない何かしら人間の原点に立ち戻るかのような感情であった。

丘は四方から登ることができ、一步一步の歩み毎に前にも後ろにも右にも左にも、手を出せば触れるばかりの間近にいくつもいくつも、いや、無数に、無限にといった方が正確だろうか、夥しい数の十字架が建ち、吊るされ、傾き、揺れている。誰が捧げたクルスだろうか、誰に捧げたロザリオだろうか。一つ一つに一人一人への深く哀しい思いがこめられた十字架である。誰もが一樣に声を飲み、息を詰まらせ、胸に溢れくるものをとどめ得なかった。

彼方に目を転じると一方の丘の裾から遥へと花野が広がっていた。

ただ中に十字架の丘麦の秋 平地美紗子

十字架の丘につづきて麦の秋 笹島美和子

実際の光景は手前側は麦秋であり、向こう側は花野であった。どちらの季語を選ぶか。麦秋は収穫期を迎えた畑のもっとも命がみなぎる季節である。鮮やかな色彩、降り注ぐ光、人も自然も歓喜あふれる光景である。強い生命力を感じさせる麦秋に対して十字架の丘は死の集合体である。人々の祈りの場所であり精霊の地である。その対比によってこの地の歴史に流れた血と涙が強く印象付けられる。これら麦秋の句は一行の共感を得た。

しかし、講師から指摘されたが、〈麦秋の中なるが哀し聖廃墟〉という先行作品、それも近代俳句の名句の存在を無視することはできない。「麦秋」の例句として不動の句である。原爆投下後の長崎の廃墟と帝政ロシアの弾圧の傷跡という背景は異にするが、どちらも歴史の悲劇の現場である。その地に立つ人々の心を打つ。その感動を類想を避けて表現にとどめたい。

十字架の丘から彼方へと花野が続いていたのも実景である。作り事も許されるが、麦秋と花野、季語でいうと夏と秋が同時に見られるところに日本の四季の分類では縛れない海外の気象がある。麦秋と十字架の丘の際立ったコントラストによって過去の悲劇と現在の平和を対照す

ることの一つの評価をしたが、そこからさらに一步踏み込んで精霊への鎮魂の祈りの心を表すのに季語「花野」を選んだ〈十字架の丘はるかまで花野延べ〉は、死者へのまたとない贈り物となる。とりどりの秋の花々は、祈りを捧げる人々を慰める。何と優しい発想であることか。それは平和を前提として成り立つことであり、「麦秋」の句にこめた一行の平和への思いを含んだ句になっている。

蛇足ながら筆者は次のように詠んだ。

露けしや十字架の丘のぼり来て 太田かほり

以上、花野の花に見送られ、花野の花に迎えられ、さらに花野の中を走るという行程の中から生まれた句をみてきた。

ところで、日本人の我々は異国の花野をどのように見たか。日本の秋を彩る花野と同一に眺めただろうか。確かに一行の目を喜ばせ、心を慰めた光景であった。そして多くの句が詠まれた。しかし、それは「ロシアの自然」ではなかったのではないだろうか。「花野」は日本人の感性が磨き上げてきた自然文化というべきものである。この日本の文化というファインダー越しに見た日本の花野に準じる花野として見たのではないだろうか。走行距離千二百四十キロの間、山はない。その風景は自ずから日本の風景とは異なっている。緑の植物や野原の草花に遠ざかり、堅牢な石の文化、黄金や琥珀の絢爛たる文化に洗脳された心が求めた日本的なものへの懐かしさが、類似性の濃い異国の花野に日本そのものを見たのではなかっただろうか。ここに海外俳句における新たな季語問題が浮上してきた。

## 9 海外俳句の素材

### 〈国境〉

型通りの国境越えではなかった。社会主義国からの出国であった。緊張し、わずかに不安が兆す。案の定、身柄拘束の疑似体験である。サングラスを外す人、サングラスをかける人。どこに行くにも句帳を携帯するのが俳人であるが、誰も所持していない。もっとも何も持たずにバスを降りるように言われたが。ところが、どこでも句を案じるのが俳人の性、後の句会で手持ち無沙汰で落ち着かない国境の検問所を素材に句が量産されていたことがわかった。念のために記すと、「多作多捨」は俳句作法の一つとされ、たくさんの句を作り、ほとんどの句を自ら没にする厳選が上達の手段である。

ロシア出国の手続きは厳重であった。一方通行のゲートに並び、パスポートとの照合が終了後も一箇所に留め置かれ、施錠された鉄扉は固い。バスの中、荷物入れなどチェックは二重三重に行われ、その間、一行は幽閉されたようなもの、鉄扉のガラスの部分からちらっとうかがう。国境の街ナルヴァに住んでいるらしい老夫婦の乗用車の中も厳重に調べられている。夫婦の一人が足が不自由だと訴えている様子であるが、容赦ない。座席の敷物まではぐり上げられ

る。車の中は生活雑貨が積み込まれ、雑然としている。物価の安い方へ国境を越えて買い物に行くということである。

国境の川に水尾ひき通し鴨 鷹羽狩行  
国境のゲート自在に夏つばめ 高田 祐  
たんぼぼの絮が飛び交ひ国境 境 惇子  
いわし雲国境で出すパスポート 松尾重子  
国境の川に涼しき軽鴨の水脈 今野佐知  
国の名が変る夏河ひとつ越え 坂本禎子  
入国の一步花野に踏み出せり 成島彰子

「国境」は海外詠らしい素材になる。人間が引いた線にかかわりなく動植物は自在に往来する。検問所の殺風景な建物に巣を作り子育てに勤しむ燕の姿、風まかせのように見えて種の保存を図るたんぼぼの知恵、流れる川の上流にも下流にも生活の場をもつ軽鴨、誰の領土でもないかのように大らかに、一面に、大胆に広がるいわし雲、悠然と流れる河、そして地続きの野に広がる花野、これら自然の一つ一つに旅の感慨が深まり、思索が深まっていく。

国境を三つ越え来し夏帽子 松尾重子

夏の旅の道連れは帽子である。七月の平均気温は十八度から二十二度、傘は常時携帯をと言われていたが、体感温度は三十度位、傘は最終日に一時的に降っただけで、帽子は文字通り旅の伴侶であった。楽しかった旅の一部始終を頭の上から見ていた帽子である。講評は「旅の長さ、楽しさ、夏を惜しむ気持ち、旅愁などが感じられる。まことに省略が効いていて見事」というものであった。行程二回の句会で九点の最高点でもあった。

#### <城塞 城壁>

城塞を守る人のなき涼しさよ 伊藤節子

講評の「平和になった涼しさ、安らぎの涼しさ」に尽きる。ロシア出国の緊張の後、国境の川沿いに残るナルヴァ城を訪れた。十三世紀に建てられた城塞である。その一角はレストランになっていた。

城壁に銃眼ずらり夏つばめ 鷹羽狩行

敵を射撃したり見張るために開けられた穴が本来の目的のために使われることは久しくなく、代わりに燕が入り出して巢にもなっている。その光景にその土地全体を覆っている平和な空気を見ているのである。

壁掛の銃身照らす夏炉の火 鷹羽狩行

城塞を観光客用のレストランに改造して使う。地下に作られたほの暗い中に赤々と炉が燃えている。炉といえども火は戦火への連想を呼ぶ。さすがに城塞らしさをとどめて、壁には銃が掛けられていた。インテリアとしては物騒な一物ではある。鉄の銃身を炉の火が照らし、壁飾りとはいえ武器としての威力を誇示するもののように感じられた。地下のレストランの小空間であるが緊迫した一瞬を想像させるに十分であった。

英霊へとどけ白夜のバラライカ 鷹羽狩行

このような句も詠まれた。いつの時代のどの戦ともしれず幾人もの戦死者の靈魂がこの城塞に浮遊しているという思いが去来する。観光客相手の楽師がロシアの弦楽器バラライカを奏でる。民族楽器はおしなべてもの悲しい。夏炉の火に、バラライカの音色に、旅の思いが深まっていった。

## 10 第二回句会〈添削例〉

「一字の違いが大違い」は鷹羽狩行講師が講演会や出版物のタイトルにするほど繰り返し指導する重点項目である。添削の名手としてテレビ、ラジオでその手腕を発揮している。今回の句会からその一部を上げる。

原 句＝戦痕を覆ひつくして花野かな

添削句＝古戦場覆ひつくして花野かな

原 句＝煙突の煉瓦の煤け麦の秋

添削句＝使はずの煙突煤け麦の秋

原 句＝城塞の守る人のなき涼しさよ

添削句＝城塞を守る人のなき涼しさよ

原 句＝門衛の微動だになき涼しさよ

添削句＝門衛の微動だにせぬ涼しさよ

原 句＝船に乗り離宮を訪ひて夏惜しむ

添削句＝宮殿を水路で訪ひて夏惜しむ

原 句＝まだ見ゆる沖の船影白夜かな

添削句＝まだ見ゆる沖に船影白夜かな  
 原 句＝咳ひとつしてよりバレエの客となる  
 添削句＝しはぶきをひとつバレエの客となる  
 原 句＝鉄壁をなせる宮殿の片かげり  
 添削句＝宮殿の鉄壁なせる片かげり  
 原 句＝海からの白夜つんざく鳥の声  
 添削句＝白夜つんざく海からの鳥の声  
 原 句＝ネバ河のさざなみ睦む白夜かな  
 添削句＝ネバ河のさざなみ睦み合ふ白夜  
 原 句＝聖堂を遙か白夜の船に乗り  
 添削句＝聖堂を遙か白夜のデッキより  
 原 句＝ピョートル像座して小鳥に肩を貸し  
 添削句＝銅像の座して小鳥に肩を貸し  
 原 句＝噴水に虹「宮殿にようこそ」と  
 添削句＝噴水の虹宮殿にようこそと  
 原 句＝跳ね橋を照らし出したる夜涼の灯  
 添削句＝跳ね橋を照らし通しの夜涼の灯  
 原 句＝釣船を横目に遊舟速さ増し  
 添削句＝釣船を横目に遊び舟速し  
 原 句＝船の水脈浮草なびく運河かな  
 添削句＝航跡に浮草なびく運河かな  
 原 句＝白き胸に下げて琥珀の涼しさよ  
 添削句＝豊胸に下げて琥珀の涼しさよ

これらの句は添削して入選句、あるいは特選句に選ばれた。

## 11 挨拶句

リトアニアは笑顔の国よひまはりよ 吉川正光

ロシアからバルト三国に入り、その国柄の違いはすぐに感じられた。人々の表情は明るく、ホテルやレストランのインテリア、料理など、豊かで洗練された印象である。若い女性が生き生きと働いている。溜息がもれる初々しさ、清潔さ、素朴さ。それに親切。小国のよさが随所に感じられる。最後の訪問国リトアニアは親しみやすい国であった。バスのドライバーがリトアニア人であったこと、ガイドが日本人であったことなども要因であった。

この句はそうした印象をよく捉えている。〈俳句は三歳の童にさせよ〉と芭蕉が言っているが、この句には小学生の作文のよさがある。素直で健康、向日葵の本意を正面から受け止め、弾ける心、弾む心をそのまま季語に託した。旅も終わりに近づいた安堵の心もあっただろう。推定平均年齢七十の集団からこのような童心にあふれる句が生まれた。挨拶句としても最高である。なお、季語「向日葵」は、講師の発案による昼食時の席題であった。

白鳥座見ずに白夜の国を去る 鷹羽狩行

白鳥座は夏の北天の星座である。夜空を横切る銀河の中に壮大な十字の絵模様を描く。旅の夜空はギリシア神話の神々のロマンが旅情を募らせるのだが白鳥座を心に描いてみることも白夜の国の白夜の過ごし方である。星座も白夜も大いなる天体の大いなる運行が織り成す神秘——遙かまで旅してきたという思いに駆られ、地球の外までも旅してきたかのような余情の中に名残が尽きない。

俳句には「挨拶」の要素があるが、帰国の途につく名残惜しさを「見ず」という打消にこめた挨拶句になっている。

海外俳句の新たな問題点を発見すると共に、優れた例句の誕生をみる旅であった。